

植物調査法

植物相調査とは

植物調査では、一般的に次の調査を行います。

植物相
植生

ある特定の地域に生育する植物の全種類を総称して、植物相(フロラ)といいます。植物相調査では、その地域に生育する植物の種類を明らかにする事を目的とします。

植物の中には、雪解けとともに地上に姿を現し、他の春植物が開花する頃には姿を消してしまう等、ある限られた期間しか見られないものもあります。例えば、ユキワリイチゲもその仲間です。そのような植物まで網羅しようと思えば、植物に普段から親しむ必要があります。言葉を持たないだけに少々苦勞を伴いますが、わかりだすと楽しいものです。

地表をつつんでいる植物の集まりを植生といいます。植生調査では、その地域がどのような植物の集団で被われているかを明らかにする事を目的とします。植物たちは、普通何種類か集まって生活していますが、この植物の集団を「植物群落」と呼んでいます。植生調査では、その地域を植物群落によって区分し、現存植生図の作成を行います。そして、現存植生図で区分したそれぞれの植物群落に付いて、典型的なポイントを選び、植物群落調査を行います。

高木層
亜高木層
低木層
草本層

植物群落調査とは

植物群落調査の方法を簡単に示します。

日本では、森林群落が発達しています。森林群落を例にすると、群落を断面に投影した場合、普通4層に分かれます。上から順に高木層、亜高木層、低木層、草本層となります(図1)。調査しようとする群落のポイントが決まれば、調査年月日、調査地位置、調査面積等必要事項を記録し、階層構造を調

べたら、各層ごとに全種類の種名を記録します。

群落の全ての種名を記録するには困ったことがあります。例えば、芽生えの状態だったり、花や実がないこともあります。成長の段階で姿形がかわるものもあります。

余談になりますが、植物群落調査でわからなかった植物の芽生えを持ち帰り育てたところ、思いもよらないものに成長したこともあります。

種名の記録が終われば、次に種ごとの量的な測定、「被度」と「群度」の測定を行います。

被度と群度

被度の測定では、それぞれの種が地上投影像どのくらいの面積を占めているのかを、被度5から+の6段階に分けて記録します(図2)。



図1 森林群落断面図

図2 被度の段階

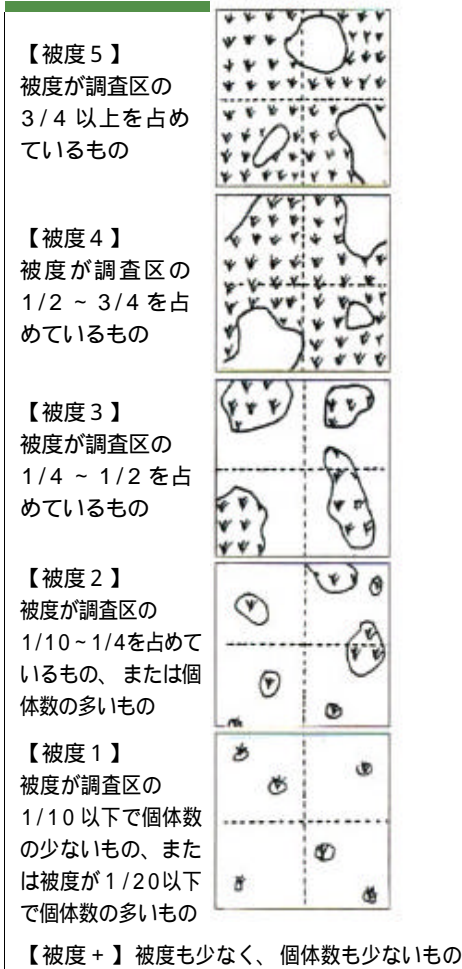
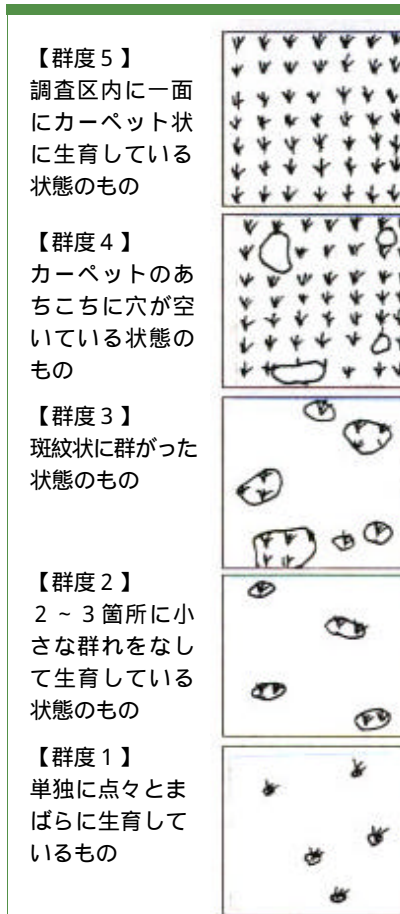


図3 群度の段階



ユキワリイチゲ



群度の測定では、それぞれの種の配分の状態を、群度5から1の5段階に分けて記録します(図3)。

以上、簡単ですが、植物群落調査の方法を記載しました。

(大阪支社自然環境調査室・長谷川薫)

参考文献：『植物群落』菅原久夫著
- 1985年 ニュー・サイエンス社

鳥類調査物語

夜間調査の巻



(原案 今関真由美 / イラスト 飯塚要)